

ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・ キャメロンについての一考察

——ふたつの「アーティスト・コロニー」を中心として—— (二)

A Study on Virginia Woolf and Julia Margaret Cameron with Focus on
Two Artist Colonies (II)

村松 加代子

Kayoko MURAMATSU

Abstract

This paper has two aims: one is to examine the significance of the two well-known “artist colonies” whose central members were Virginia Woolf (1882-1941) and Julia Margaret Cameron (1815-78). Both women are, first and foremost, famous for their innovative ideas in their respective fields of art, namely, literature and photography, and have frequently been referred to in the discussion of “modernism” in art scene.

As Julia Margaret’s great-niece, Virginia naturally developed an interest in, and an affinity with, her remarkable ancestor though Julia had been dead for four years when Virginia was born. We can see Virginia’s affectionate interest in Julia, in the form of her two works, *Freshwater: A Comedy* with her great-aunt as its heroine, and *Victorian Photography of Famous Men and Fair Women by Julia Margaret Cameron* which Virginia compiled with Introduction by herself and her art critic friend Roger Fry.

The other aim of this paper is to clarify the national identity of the British people by shedding light on “salon culture” (my words) which used to flourish through the 18th and 19th centuries and is still found in different scenes of British social scenes.

In this part II, the Bloomsbury Group and its influences on Virginia Woolf, one of its two pivotal members and one of the greatest writers in the twentieth century, are considered, just as in Part I the salon called “Dimbola Lodge” and its influences on Woolf’s great aunt, Julia Margaret Cameron, the hostess of the salon and one of the most famous photographers in the Victorian era were considered.

ブルームズベリーは半ば事実で、半ばフィクションである。 —— A ローゼンブラット

私は友人たちを馬車のランプとして使う。あなたたちの明かりで……別の野原が見えてくる……むこうに丘がある、私の景色がひろがる。 —— V ウルフ

はじめに

本稿は、作家ヴァージニア・ウルフとその大叔母で写真家のジュリア・マーガレット・キャメロンがその中心的存在であったふたつのアーティスト・コロニーに注目し、それらがかれらの芸術的営みにいかに深く関わっていたか、また、それらがかれらの芸術作品にどのような形で表れているかについて検証するものである。さらには、英国におけるサロン文化と国民性・社会思潮との関わりを考察することによって、英国のナショナル・アイデンティティの一端を提示しようとするものである。

本稿「ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・キャメロンについての一考察（二）」は、先に著した同題の論文（一）に続くもので、今後発表予定の論文（三）と合わせて全編が完結するものである。

先の論文（一）では、「サロン」の歴史をひも解き、その上で、キャメロンのサロン「ディンボラ・ロッジ」と彼女の関わりを考察した。本稿、すなわち、論文（二）では、「ブルームズベリー・グループ」とウルフの関わりを検証する。これら二つの論文、すなわち、論文（一）、論文（二）を仮に各論とすれば、最終部の論文（三）では、それら（一）、（二）を統合しつつある結論へと導くことを目途としている。すなわち、キャメロンとウルフが、いかにそれぞれのアーティスト・コロニーの影響下にありながら独自の芸術世界を構築していったかを検証する。さらには、本研究全般を通じて初めて浮き彫りにされる英国のナショナル・アイデンティティの一端をも提示しようとするものである。

さて、ウルフと「ブルームズベリー・グループ」という本稿（二）のテーマについては、20年前に著した拙論「Bloomsburyの知的貴族たち」の中でかなり詳細に論じている。当時、1991年の時点では、「ブルームズベリー・グループ」の中の有名なメンバーたち、ウルフやストレイチィ、ケインズなどの著作、研究書、論文などはかなりあったが、「グループ」についての出版物となると、邦文文献が3点（そのうち2点は英文研究書の翻訳書）、日本人の手になる研究書としては橋口稔著『ブルームズベリー・グループ』（岩波新書）があるのみであった。それから20年経た現在、そうした状況は変わったであろうか。また、英国をはじめとする欧米における当時の状況、ならびに、現況はどうであろうか？ 先述した拙論を執筆していた時点では、かの国々においても「グループ」をテーマとしたモノグラフは10数冊に留まったと記憶している。しかし、日本の場合と異なり、以来夥しい書物が出版され、ことに近年、最後のメンバーがつぎつぎと世を去るにつれてその傾向が強まっているというのが実情である。

「ブルームズベリー・グループ」に寄せるこうした欧米における関心の高まりとそれに伴う関連書の数の増大ぶりに引き換え、日本での状況は依然として変わらぬように思われる。日本における本格的なモノグラフとしては、1995年出版の坂本公延著『ブルームズベリー・グループの群像—創造と愛の日々—』、そして、翻訳書としては1997年出版のクウェンティン・ベル著／北條文緒訳『回想のブルームズベリー——すぐれた先輩たちの肖像』（みすず書房）があるのみである。

上記の状況を踏まえ、本稿を執筆するに先だって以下の3つの方針を立てた。すなわち、一つ目は、できるだけ広範に亘って新資料にあたることであり、二つ目は、先の論文「Bloomsburyの知的貴族たち」の記述内容との重複を極力避けることである。具体的には、先の研究が「グループ」の歴史のいわば第1章にあたる時期——すなわち、作家のウルフ、ストレーチィ、デズモンドが書評を投稿し、画家ヴァネッサが初めて肖像画の注文を受けた時期にして、ロジャー・フライを除いた全員がほとんど無名であった時期に集中していたのに対し、本稿では、第一次世界大戦という第2章を挟み、第3章にして最終章——メンバーの大半が有名人として活躍していた時期に比重を移した。また、先の論文では言及するにとどめたE M フォスターその他のメンバーについてもかなりの紙数を割いた。さて、三つ目にして最後の方針は、ある事項をめぐる複数の解釈が存在する場合には、まず当事者である「グループ」のメンバー、ついでその周縁者の見解を採択するという優先順序を設けたことである。

「ブルームズベリー・グループ」とはなにか

「ブルームズベリー・グループ」は我々の文化史における特異な現象であり、また、これまでひどく誤解されてきた。このグループをある一つのお決まりのカテゴリー——ある運動、ないしはあるサロン、ないしはある流派に無理やり押し込めようとする努力が今後も続くことはまず間違いないであろう。だが、「ブルームズベリー・グループ」はそのいずれでもないのである。それは、たまたま同時代人とは見解を異にし、仲間内では類似の考え方をし、生涯にわたってその友情を保ち続けた一群の友人たちを指すのである。この意味において、「ブルームズベリー・グループ」という言葉自体がその実態を顕すと同時に隠すものである。(Gadd 197)

上記の引用からも分かるように、「ブルームズベリー・グループ」（今後は、メンバー自身がそう呼びならわしていたように、「ブルームズベリー」と呼ぶ）については、その定義、見解、事実関係をめぐってさえ、論者と関連の著作物（その数が今日までにかなり大きくなっている！）によって、大なり小なり食い違っていて、ついにはその中核メンバーであったヴァネッサ・ベルをしてそのようなグループは存在しなかったとまで言わしめるほどに実態があつて無きがごときも

のなのである。

というわけで、筆者のこの研究への取りくみ自体がそもそも無謀な企て、ないしは、その審判をどこに仰いだらよいかさえわからないレースへの出場とも言える。それゆえ、あえてそれを選んだ筆者の内なる相反感情（心もとなさと愉悦）は故なきものとは言えず、また、そのあたりにこそ「ブルームズベリー」に潜む根源的な性格が示唆されているとも言えるのである。

「ブルームズベリー」に寄せる世間の行きすぎた関心、干渉、誤解に辟易していたヴァネッサは義弟レナード・ウルフに宛てて「もしかしたらベンソン嬢という人がそちらにも問い合わせをしてくるかもしれない」と前置きしてから、自分としては彼女への返信に「ブルームズベリー」などというものは存在しなかったと告げたことを伝え、さらにこう続けている——「私はこうした事柄についていつまでも人々に語り続けるわけにはいきません。あの人たちの理解ときたら、無理もないけれど、いつだって救いようのないほど間違っているのですから。もし、ブルームズベリーについてなにか書かなければいけないということであれば、それはメンバー自身によって書かれるべきです（大半のメンバーは現になにかしら書いていますけれど）。ひとは生存している人たちについて語るわけにはいきませんし、世間の人々は私たちがこの世を去るまで待たなければなりません。過去の世代については、これならば語ってもよいと思う事柄についてはそうしてもいいですが、私自身の世代については語るわけにはいきません——もっとも私の家族と友人たちに対しては話は別ですが。」（Lウルフ宛て書簡 1920年7月20日付）

ヴァネッサ同様、彼女の夫クライヴ・ベルもまた、保留つきではあるが、「ブルームズベリー」の存在を否定したという事実が、グループの周縁人物にしてジャーナリストのレイモンド・モーティマーの書簡からも窺える。かれは、刊行されたばかりのクライヴのあるエッセイに触れてかれ宛てにこう記している——「ブルームズベリー」が一般大衆の関心をひくのは必定です。なぜなら、英国人のインテリ連中はフランス人ほどには生得的に同族中心主義をよしとしないからです。……いずれにしても、気晴らしにはうってつけでしょうが、「ブルームズベリー・グループ」なるものは存在しなかったなどというあなたの言葉は無駄であると思います。グループとしてそれがいかに漠然たるものであるとしても、これまでの影響力のほどは歴然としているのですから。（Ed.Rosenbaum, *The Bloomsbury Group* 115）

クライヴ自身はこう記している、「……最近生まれた人々や遠い国の人々が自分の見解と真っ向から対立するような見解を抱えていることはむろん承知している。そうした人々においては是非ともみずからが創造したブルームズベリーを楽しんでいただくのではないか」。そして、この寛

大ともとれる発言に続けて、「……繰り返しになるが、ジャーナリストや放送者におかれては、どうぞ明示的であっていただきたい。これが私のささやかなお願いであり、それが充たされれば私の知る限りのことはお話ししてお役にたちましょう」と記している。(127-28)

上記のように、ヴァネッサもクライヴもは共にグループの存在を否定しているわけだが、その文脈からして、それらがともに種々の憶測や恣意に基づく世間の「ブルームズベリー」評や非礼に対する鬱憤から出た文言であることは明白であろう。しかし、これを裏返せば、「ブルームズベリー」なるものは現に存在し、それは外部の者の好奇心を掻きたてずにはいられない、かといって、憶測の域を越えては踏み込めない性格のものであったということであろう。このあたりのことを、クウェンティン・ベルが見事に言い当てている。曰く、「ブルームズベリーは『考える限り無定形な一群の友人たちの集合体』であり、これについて論じようとする事自体、「なかばカメレオン、半ばヒドラのような怪獣の性格を憶測したり、渦巻きの大きさを測定しようとする試みである」。(Bloomsbury 21)

「ブルームズベリー」のメンバーたちについて言えば、その大半が1876年から1885年の間に生まれている。いわばその第二世代で最後のメンバーのひとり、ヴァネッサの次男クウェンティン・ベルが2008年に世を去り、もう一人のメンバー、娘のアンジェリカ・ガーネットが今日94歳である。他にももうひとり血縁者としてレナード・ウルフの甥セシル・ウルフがいて、高齢ながら健在である。かれはここ17年間 Cecil Woolf Publishers の社主として 'Bloomsbury Heritage' という統一タイトルのもとに62編の「ブルームズベリー」関連のモノグラフを出版している。筆者も私事ながらその一冊、*The Rodmell Papers: Reminiscences of Virginia and Leonard Woolf by a Sussex Neighbour* の編集・出版に際して、著者であるダイアナ・ガードナーの親友として、彼女亡き後、彼女の姪の依頼を受けて微力ながらこれに関わった ('Introduction' に言及がある)。その機縁でセシルとは何度かやり取りがあったが、いかにも血筋と教養に裏打ちされたもうひとりの「知的貴族」を思わせる人である。ただし、セシルは、その血縁的近さにも拘わらず、あるいはそれ故に、「ブルームズベリー」とは一貫して距離を置き、個人的な感慨・見解はいっさい公けにせず、関連書の出版に従事している。

上記のセシル・ウルフによる出版物を含め、近年、「グループ」の面々に関する書きものは増え続けるばかりである。「人々は私たちがこの世を去るまで待たなければなりません」とヴァネッサが1920年に記した時、彼女は今日の活況を予知していたのであろうか。

「ブルームズベリー」の歴史にとって1928年という年は意味深い。なぜなら、この年に初めて「ブルームズベリー」についての正確な記述が先述のレイモンド・モーティマー (1895-1980) に

よってなされたからである。それから20年ほど後の1949年、レナード・ウルフはアメリカのHarcourt Brace社から「ブルームズベリー」の「芸術的・知的意義」について本を出版したいので誰か執筆者を推薦してもらえないかという問い合わせを受けた。かれは同年8月10日付書簡の中で、そうした本が書けるのはただ一人、それはレイモンド・モーティマーであるとこたえている（ちなみにこの企画は実現しなかった——筆者注）。

ブルームズベリーの定義については前述したように既に多くの論者が試みており、その論拠も大体同じような資料に求める傾向にあるので、ここでは、これまで特筆されることが少なかった人物にして、レナードから「ブルームズベリー」のスポークスマンとしてのお墨付きをもらった先述のレイモンド・モーティマーの見解を紹介したい。レイモンド自身は自らを「ブルームズベリー」の正式なメンバーではなく「仲間」と位置づけているが、一方、レナードの方は「不可欠の若手メンバー」と記していることも付記しておこう。レイモンドが、実際、*New Statesman* 誌（1935-47）の文芸欄編集者として、また、*The Sunday Times* 紙（19480-79）の主幹評者として実際にブルームズベリー・エートスを世に知らしめるのに大いに貢献したという事実を考えれば、「不可欠のメンバー」とするレナードの位置づけのほうが妥当と考えられる。

さて、レイモンドは、「ブルームズベリー」のメンバーを結びつけているものを「ブルームズベリー・スピリット」と名づけ、その要因はふたつあるとしている。すなわち、ひとつは「愛国心および男女についての理性主義と虚心坦懐な姿勢」（Ed. S P Rosenbaum, 115）であり、もうひとつは「理性への信念、そして、真実追究と美の鑑賞こそが人間の諸活動で最も大切であるとする信念である…いかなる話題もタブーではなく、いかなる伝統も検証なしに容認されることはなく、いかなる結論も忌避されることはない。偽善的な社会にあっては容赦がなく、戦闘的な社会にあっては平和主義者である。善と看做すことがらについては情熱をこめてこれに身を挺し、二流と看做すことがらについてはこれを容赦なく拒絶し、妥協することについてはこれを断固として拒否する。」（*Studies in Twentieth-Century Culture*）

以上からも明らかなように、「ブルームズベリー」はなにか共通の目的や理念の下に結成された、あるいは、指導者をもつ意識的な集団ではなく、たまたま互いの感じ方、考え方に共感を覚え、生涯にわたってその友情を深め、互いに影響し合った自然発生的な友人たちの集まりにすぎない。「ブルームズベリー」の他にもこれと似た若者の集合体はあるだろう。ただ、「ブルームズベリー」の独自の特徴を言うならば、上記のものの感じ方や考え方を生涯にわたって貫き通し、それを実践に移したことであろう。かれらの理性主義は徹底していて、事柄の公的、私的を問わず、情緒的なことがらでさえ、結論を出すに先立って必ずそれに理性の光をあててから判断しよ

うとした。「ブルームズベリー」に顕著なメンバー相互の検閲なしの愛情、相手と同時に自らにも批判の目を向ける姿勢、換言すれば、その相対主義、平和主義、独特のユーモアやウィットやアイロニー、そして、なによりも個人の自由を尊重する姿勢にそれがよくあらわれている。そして、もうひとつのユニークな点、それは彼らの大半が上層中流家庭の出身であり、ケンブリッジ大学に学び、そろってその業績ゆえに文化史にその名をのこしたいいわば「知的貴族たち」であったことである（拙論「ブルームズベリーの貴族たち」にて詳述）。

まず、かれらの理性重視の姿勢についてであるが、それを試もし鍛えもしたのは仲間内の会話であり討論であった。かれらがそろって古代ギリシャ文化を、特にプラトンを愛したのも、また、「ブルームズベリー・スピリット」の淵源とも言えるケンブリッジ時代の師で哲学者のGEムアが晩年「自分は質問に答える者としてよりも、質問する者としてより優れていた」と述懐していることも同じ対話重視の姿勢から出ている。後年、第二世代のメンバーとして実際にかれらの会話の場に居合わせたヴァネッサの次男クウェンティン・ベルは後に「ブルームズベリー」の特性についてこう述べている――

大いに話し合ったということを除いて「ブルームズベリー」の共通項は何であろうか？ おそらく、このこと自体があるひとつの特徴かもしれない、なぜなら、話し合わず、怒鳴り合ったり、殴り合ったりするグループというものもあるのだから。「ブルームズベリー」は何ひとつこのようなことはしなかった。互いに大いに意見が食い違ったとしても、「ブルームズベリー」は話し合った。実際それ以上のことをした。概して理性的に話し合った。友人同士ならばそうするように、友情に特有のありったけの気儘さとありったけの愛情をこめて話し合ったのである。実際、「ブルームズベリー」は、平和的で理性的な討論というものに信を置いていた。(Bloomsbury 103)

しかし、遺憾なことに、会話というものはこれをそのままに再現することには限界がある。レオン・エーデルが言うように、ある会話がいかに輝かしく見事であったとしても、それが、偶然あるいはある目的を以て記録された場合、それは非連続的で断片化した奇妙なものになってしまう。それには、タバコの煙、身振り手振り、色彩、バレエのような身体の動き、自然な、あるいは作った微笑、言葉の微妙な温かみ、あるいは、毒気が欠けているからである (Edel 150)。そして、会話の宿命とも言えるこの再現の不可能性もまた、「ブルームズベリー」の部外者にその実態把握を困難にさせ、誤解を抱かせる小さからぬ要因であると言えよう。

それはともかくとして、かれらがいかにソクラテスやプラトンよろしく理性に基づく対話を重

視したかについては、「ブルームズベリー」の周縁者、ナイジェル・ニコルソンの言葉がよく語っている。曰く、「ジョンソン博士の仲間が全員この世を去って以来、これほど影響を及ぼし合った友人仲間はいない」。

「オールド・ブルームズベリー」の誕生から終焉まで

今後の論議の便宜をはかって、「ブルームズベリー」の創設当初のメンバー、かれら自身がヴァージニア・ウルフの命名を受けてそう呼ぶところの「オールド・ブルームズベリー」(‘Old Bloomsbury’)の13名を紹介しておく。ちなみに、「ブルームズベリー」(‘Bloomsbury’)という言葉はロンドンのある地区の名前であり、その名の由来は、この地にブレモンド(Blemond)家の荘園(burh)があったことに拠る。しかし、20世紀初頭、上層中流階級出身の芸術趣味豊かな知的エリートたちがつぎつぎとこの地に住み始めたことから、かれらを指す言葉ともなり、またかれらの築いた精神風土を指す言葉ともなった。いわば人格化された地名である。また、メンバーのひとりモリー(メアリの愛称)・マッカーシーは「ブルームズベリー・グループ」のメンバーたちを‘Bloomsberries’(‘berries’は小さな木の実を意味する‘berry’の複数形——筆者注)という愛称で呼び始めたが、もともとは、彼ら夫妻が住む「チェルシー地区」(Chelsea)と区別するために使いだしたと言われている。その他にも、グループの何人かがホモセクシュアルであったので、‘Bloomsbuggers’(‘bugger’は男色者の意——筆者注)と揶揄する外部者もいた。ヴァネッサは‘Bloomgroom’と呼ぶこともあったと伝えられるが、これは花婿を意味する‘bridegroom’にかけたのだろうか。それとも、宮内官ないしは厩舎を意味する‘groom’とかけたのだろうか。い

Old Bloomsberries (元々のメンバーたち)

【*印は「読書会」(＝「深夜会」)のメンバー +印は使徒会)のメンバー】

- ヴァージニア・ウルフ (旧姓：スティーヴン 1882-1941) 小説家・評論家
- *+レナード・ウルフ (1880-1961) 政治・文明批評家・小説家
- ヴァネッサ・ベル (旧姓：スティーヴン 1880-1969) 画家
- *クライヴ・ベル (1881-1964) 美術・文化評論家
- ダンカン・グラント (1885-1978) 画家
- エイドリアン・スティーヴン (1883-1948) 精神分析学者
- *+リットン・ストレイチー (1880-1932) 伝記作家
- +ロジャー・フライ (1886-1934) 美術評論家・画家
- E M フォースター (1879-1970) 小説家・エッセイスト
- +メイナード・ケインズ (1883-1946) 経済学者・大蔵省勤務
- *+サクソン・シドニー・ターナー (1880-1962) 大蔵省勤務
- +デズモンド・マッカーシー (1877-1952) 文芸評論家
- メアリー (モリー)・マッカーシー (1882-1953) 小説家

ずれも、それぞれにその内実の一端を示していて興味深い。

「ブルームズベリーがいつ始まり、いつ終わったのかを言うことは不可能である」と先述のレイモンドは断言しているが、なるほど、原メンバーの間でも意見が食い違っている。だが、ここでは、複数のメンバー、周縁者、研究者が掲げる論拠を比較検討することによって最大公約数的な仮説を提示してみたい。

まず、その歴史のアウトラインを記すと以下のようなになる――

「ブルームズベリー」誕生に先立ってその母胎ともいうべき会があった。それは1889年10月、後のメンバーの中の5人、すなわち、クライヴ・ベル、リトン・ストレイチー、シドニー＝ターナー、レナード・ウルフ、トゥビィ・ステイヴンがケンブリッジ大学・トリニティ・コレッジに入学した時に遡る。入学したての意気揚々とした学生たちがよくするように、彼らも日を措かず「読書会」を創始し、土曜日ごとにクライヴの部屋で集まるようになった。この会はもうひとつの「使徒会」のあとで集ったので会合時間が深夜になったところから「深夜会」とも呼ばれる。

卒業後、トゥビィは閑静なケンジントン地区・ハイド・パーク・ゲイト22番地の自宅に戻ったが、1904年に父親が死去すると、それを機に姉ヴァネッサ、妹ヴァージニア、弟エイドリアンと共に同じロンドンの中でも今度はブルームズベリー地区・ゴードン・スクウェア46番地に移り住み、兄弟姉妹だけの自由な生活を始めた。しかし、トゥビィにはケンブリッジでの知と友情の日々が忘れられず、翌年、毎週木曜日をかれの「家庭招待日」と宣言した。それを受けて近隣に住む旧友たち、そして「深夜会」や「使徒会」の仲間たちがトゥビィの自宅を訪れるようになった。「ブルームズベリー」は、この「木曜の夕べの会」を母胎として発展していくのである。

しかし、未だヴィクトリア朝の社会風潮が色濃く残る中で始まったこの会は、その変則さ故に世間の矚感を買わずにはいられなかった。ヴァネッサは「ブルームズベリー覚書」の中でこう記している――

恐らく、「ブルームズベリー」には異常なところなど全くなかったであろう。だが、どういふわけか、世間の人びとの目に映った私たちの姿は、私たちの言動や振る舞いについて監視する年長者をひとりももたない、そんな新しい環境の中で暮らし始めた若者集団としてであったようである。そして、当時これは男女が混在した集合体としては普通のことではなかった。階級制度が未だ存在していたからである。リトン・ストレイチーとヴァージニアのような人々が同じ仲間にいるということは当然ながら問題視されたのである。だが、私たちは

そのことに殆ど気づいていなかったと思う。(クライヴを除く大半のメンバーについても言えるが、特にステイーヴン家、ストレイチー家、グラント家は代々続く上層中産階級に属する。また住所で言えば、ブルームズベリー地区は大英博物館、ロンドン大学、古書店などがあり、一大文教地区ではあるが、ケンジントン、チェルシー、ハムテッド地区よりも社会的ステイタスにおいて劣る——筆者注)。

1906年9月、トゥビィは姉妹や友人たちと共にギリシャを皮切りに旅をし、そこで病を得て11月には世を去った。26歳であった。その2日後、ヴァネッサはかつて求婚されたことのあるクライヴから再びプロポーズを受け、今回は承諾した。ヴァージニアとエイドリアンはそれまでの住まいを姉夫婦に譲って、そこからほど近いフィッツロイ・スクウェア29番地に移り住んだ。そこで「木曜の夕べの会」のサロンが今では2つあることになった。それについては公平を期すために姉妹の家が隔週、交互に使われた。ヴァネッサはまた、「木曜の夕べの会」とは別に「金曜クラブ」も創始した。前者が文学に傾いた会であったため、画家の彼女としては芸術について語り合い、一緒に展覧会を開催したいとの思いがあった(メンバー13名中3名が画家、美術評論家、その中1名は両者を兼ねた者であり、6名が著述に関わる者である)。

1910年という年は、英国の現代史でも様々な未曾有の出来事に見舞われた年である。公的出来事としては、5月にエドワード二世が死去し、民主党が地滑りを起こし始め、ハレー彗星が観測されている。9月にはウェールズで炭坑夫のストライキ、11月には後に「黒い金曜日」と呼ばれることになる婦人参政権論者たちの過激なデモがあり、その翌日には119名もの女性が逮捕されている。

「ブルームズベリー」関連では、これを以てその存在が公的にクローズアップされることになる二つの出来事があった年であった。

一つは、ヴァージニア、弟エイドリアン、それにダンカン・グラントが参加した2月の「ドレッドノート号事件」である。本人たちはジョークのつもりであったが、かれらはアビシニア皇帝とその一行になりすまし、英国王立海軍を訪問すると触れ込み、実際に手厚い歓迎を受けたのであった。こともあろうに英国王立海軍をまんまと欺くのに成功したこの事件とかれらの名前は新聞紙上で公の知るところとなった。後年、エイドリアンはむしろ誇らしそうにその顛末記を本にしている。

11月には、「ブルームズベリー」にとっては「ドレッドノート号事件」よりも、はるかに意味深い、また、世間を騒がせた出来事があった。最年長でもあり有名人でもあったロジャー・フライが企画し、メンバーの協力を得て開催した「マネと後期印象派展」がそれである。これについては拙論「Bloomsburyの知的貴族たち」の中で詳述したので、ここでは、会場を訪れた人々がそこで初めて目にしたセザンヌ、ゴッホ、マチス、ゴーギャンらの絵画をベテン、ポルノまがい、

子どもだましの作品として嘲笑し主催者にくってかかったという事実だけをくりかえし、これを機に「ブルームズベリー」の名が初めて記録に付されたという事実を指摘するにとどめたい。

1912年、ヴァージニアがレナード・ウルフと結婚し新居を構えた。一般に、会員同士の結婚はその会を弱体化させる傾向にあるが、ヴァネッサとヴァージニアの姉妹の二つの結婚は逆にそれを強化することとなった。これは、妻たちが結婚前から夫とともに「ブルームズベリー」の仲間であり、そろって自分たちの住まいを会場場所として提供しつづけて、ほとんどのメンバーが男性であるこの会にあって見事なホストぶりを発揮したからでもあろう。後年、ヴァネッサとヴァージニアがロンドンから車で2時間のサセックス州に購入した2件の家チャールストン・ファームハウスとマンクス・ハウスを含め、いまや「ブルームズベリー」の会合拠点が不動のものとなったばかりではない。そこにはいつでも家庭的なもてなしが約束されていたからである。

しかし、1914年、第一次世界大戦が勃発し、やがて徴兵制度が敷かれると状況は一変する。男性メンバーたちは大蔵省勤務のメイナードを除き、全員が平和主義者として「良心的兵役拒否者」の途を選び、それとひきかえに農作業を余儀なくされることになった。当初はオットライン・モレル令夫人の広大なマナーハウスを使わせてもらっていたが、間もなく公的な耕地に限るという条件が付された。先述したチャールストン・ファームハウスもその目的でヴァネッサが購入したものである。ヴァージニアとレナード夫妻はロンドン郊外、リッチモンドのホガース・ハウスに移り住み、他のメンバーたちも主として農作業に従事するため、あるいは他の事情から各地に散らばっていった。1916年、ヴァージニアは、「ブルームズベリー」は爆裂したとも、朝霧のように消え去ったとも表現している。もはや、「ブルームズベリー」は本来の勢いと闊達さを失い、メンバーたちは祖国の公的責務を分担することを余儀なくされた。

第一次大戦の時期は「ブルームズベリー」の歴史の第2章ないしは幕間に相当する。ちょうど、ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』の家族の物語が戦時を挟んで3部構成をなしていることと符合するかのよう。

この間の特筆すべき出来事は、1917年にクライヴが仲間たちに「偉大な歴史的グループの肖像画」の制作をもちかけていることである（この肖像画は後年ヴァネッサによって描かれた——筆者注）。国家的危機の最中であって、提案者クライヴの胸中にはなにがあったのだろうか。戦禍によって全てが消失する前に「ブルームズベリー」の存在を後世に知らせたかったのだろうか。「偉大な」という形容詞にはメンバーたちへの誇らしい気持ち、自負心がこめられていたのであろう。

一方、「良心的兵役拒否者」の途を選択したことによって、「ブルームズベリー」は世間から罵倒されることになる。ヴァネッサは「ブルームズベリー覚書」の中でこう記している、「ブルームズベリー」に寄せる世間の敵意はいまや本物となり、もはや嘲笑うべき、そして刺激的でさえあるジョークなどではなくなった。どこに言っても目にする物憂いカーキだけが適切この上ないものであるかのように見受けられた。」(Ed. Rosenbaum, *The Bloomsbury Group* 112)

さて、次に、かれらが最も頻繁に会合をもった1904年から1914年までの「ブルームズベリー」の様子をメンバー自身の著述に求めてみる――

まず、男性メンバーの目に映った初期の「ブルームズベリー」の様子について、ダンカン・グラントが回想記「ヴァージニア・ウルフ」の中でつぎのように記している――

僕が出会った社会的地位を自ら捨てた人たちは、主として画家とボヘミアンたちだった。仮にスティーヴン家の仲間が自分たちの属する階級の因習を拒否したとするなら、それはかれらが知的に正直だったからである。

かれらは傷つき、葛藤し、そして、ついにある精神的姿勢に辿りついた。かれらのそうした精神的姿勢が友人たちに大きな影響を与えることとなった。

たとえ、それを影響力と呼ぶにしても、ヴァージニア・スティーヴンとその姉たち本人はそれに気づいていなかった。

外から受ける全体的な印象は、ケンブリッジの新しい友人たちの考えを吸収しているふたりの若い女性たちというものであっただろう。むろん、これはある程度当たっていた。サクソン・シドニイ＝ターナー、クライヴ・ベル、リトン・ストレイチィ、メイナード・ケインズは何についてであれ、全ての事柄について自ら進んで彼女たちと一緒に、あるいは、彼女たちの前で話して憚らなかった。それがまた全員の利するところとなった。当時のケンブリッジが必要としていたのは少しばかり女性的な社会であったからである。もしもケンブリッジが少々無味乾燥としており、たいがいの事柄がまじめ一方の受け止められ方をしていたとするならば、そこでは芸術が重要視されていなかったからである……ケンブリッジの卓越した哲学者(G E Mooreのこと――筆者注)がこうした若者たちに圧倒的な影響力をもっていたことは確かである。「善」、そして、ある精神状態の価値がしばしば話題に上った。「使徒会」(「深夜会」以前にあった会――筆者注)の若者たちは、そこに予期せぬふたりの若い女性たちの姿を見て、彼女たちの大胆さと懐疑主義に衝撃を受け、驚嘆することとなった……そこでは(批評するにあたっての)完全な率直さと互いの見解を尊重する姿勢だけが期待された。(Horizon, 405)

さて、次は女性メンバーの目に映ったある夜の会合について、ヴァージニアが回想記「オールド・ブルームズベリー」の中でつぎのように生き生きと描いている――

……ドアのベルが鳴り、今述べた驚異的な人たちが玄関に入って来たとき、ヴァネッサと私は当然ながら興奮しお喋りしている最中でした。夜も更けていました。部屋には煙が充満

し、ロールパン、コーヒー、ウイスキーが散在していました。私たちは白い繻子の衣服も小粒の真珠も身につけてはいませんでした。正装など全くしていなかったのです（先代、例えば彼女の父レズリー・スティーヴンの「木曜会」では全員が正装の上参加していた——筆者注）。トウビーがドアを開けに行きました。入ってきたのはシドニイ・ターナー、ついでベル、ついでストレイチャーでした。

かれらはためらいがちに控えめに入ってきて、ソファの隅っこに静かに身体を折り曲げて座りました。長いこと誰も何も言いません。旧来の私たちの会話の切り出し方は通用しないという感じです。ヴァネッサ、トウビー、それにクライヴがいました。もしクライヴが居合せたら話ですが、かれは何か違った話題を持ち出したことでしょうか。なぜなら、クライヴは色々な点で他の者とちがっていましたから。そしていつもきまって談話のためには自らを犠牲にしてまであれこれ違った話をしはじめたものです。……ハイド・パーク・ゲイトの応接間ではありえなかったことですが、会話はとぎれがちでした。でも、その沈黙は退屈なものではなく、それには困難さが詰まっていました。口にするに値するかどうかの基準が余りに高いために、口にするだけの価値がないような発言で沈黙を破るようなことはしない方がいいという風でした。……議論的は「美」であったり、「善」であったり、「リアリティ」といったものでした。話題が何であれ、私たちが全力を挙げて取りくむような何か抽象的な問いでした。あるひとつの議論の一段階あるいは半段階にこれほど集中して耳を傾けたことはありません。自分自身の小さな投げ矢をより鋭利なものにし、それを放つのにこれほど苦労したこともありませんでした。そして、自分が寄与したものが容認されたときの喜びといったら、それは大変なものでした。(Moments of Being 165)

上記の記述から伝わってくる会の雰囲気はいずれも気の置けない仲間同士の砕けた語りというよりは、ケンブリッジの学生たちの勉強会に似ていなくもない。それは、学巣を離れて間もない男性メンバーたち（ダンカンを除く全員がケンブリッジに学んでいる）が未だケンブリッジのピューリタニズムの下にあり、家族以外の女性と親しく接するような日常生活とはかけ離れた年月を過ごしてきたからでもあろう。しかし、ヴァネッサとクライヴが結婚した頃から、あるちょっとした出来事をきっかけにその遠慮がちでこぢない会は急速に親密さと率直さを増していく。特に、サセックス州の牧歌的な丘原にあるクライヴ夫妻の家・チャールストン・ファームハウスには何日か滞在したり住みこんでしまうメンバーもあった。そうしたチャールストンでのある日の「ブルームズベリー」の様子を、ケインズの知己、美術史家のリチャード・ショーンがつぎのように具体的に伝えている——

共同生活の中心にあったのは勤勉と不断の営為だった。偶々チャールストンを訪問した人

は家に誰もいないと思ったかもしれないが、それも無理はない。だが、そのうちに住民がひとり、またひとりと、アトリエから、図書室から、窯元から、あるいは、庭の一角から、ゆったりとした昼食や延々と続くお茶を目あてに姿を現す。そして、その後、またそれぞれの持ち場に帰っていく——フランス語の『ローマ帝国史』へと、アトリエの静物画あるいは夕べの風景へと、校正作業あるいは書評の著述へと、その日の差し迫った仕事へと、雑草取りあるいは縫物へと。あるいは、デッキチェアに座ってお喋りをするために。そこでは、煙草のブルーの煙が庭の火打石の壁につきあたり、脈絡のない会話と笑い声が混ざりあいながら壁の向こう側へと渦を巻きながら漂い出ていく。(R Shone,)

「メモワール・クラブ」とその後

さて、ここからは、「ブルームズベリー」の歴史の第三章にして最終章である。

戦時下は不規則にしか会うことができなかつたオールド・メンバー13人たちも、戦争終結とともに国家的結束から解放され、個人としての自由を取り戻すことができた。1918年11月付のカ・コックス宛書簡の中でヴァージニアは、「……私たちの国はふたたび個人の国になりました」と記している。戦争が続く間全員が4年分歳を重ね、ダンカン・グラントを除く全員が中年になっていた。そして、全員が自らの分野で大なり小なり公的業績をあげてもいた。1920年12月23日付バーバラ・バジェナル宛て書簡にヴァージニアはユーモアたっぷりにこう記している——ゴードン・スクウェアはロンドン動物園のライオンたちにそっくりです。どの動物も檻から檻へと動きまわっています。どの動物も危険で、互いをかなり胡散臭いと思い、でも、魅力と神秘をいっぱい湛えています。私は怖くて檻の中には入れずに歩道を歩きながらガラス窓越しに檻の中を覗き込んでいます。(Ed. Rosenbaum, *The Bloomsbury Group* 62)

1918年の初め、メンバーのひとり、モリィ・マッカーシィは「ブルームズベリー」の内輪の仲間と一緒に「小説クラブ」を立ち上げた。これには、作家として抜群の才能をもつ夫デズモンドをしてジャーナリストから本格的な小説家へと転向させたいという妻の願いがこめられていた。その10年前に「ブルームズベリー」の数ある会のひとつであった「戯曲読書クラブ」の改訂版ともいべきものであった(ちなみに、デズモンドは、読者をしてその作品をぜひとも読みたいという気にさせるだけの書評が書ける文芸批評家は作家と同列であると考えていたため、生涯ジャーナリストに徹する途を選んだ——筆者注)。

ともあれ、戦前の集まりを復活させたいというモリィの発案で「メモワール・クラブ」が設立さ

れ、1920年2月27日金曜日のオープニング・セレモニーへの招待状がメンバーたちの元に届けられた。この招待状の中でモリィは、「メモワー・クラブのメンバーは、ロジャー・フライ、デズモンド、メイナード、ダンカン、プロウビィ、ヴァージニア、シドニィ・ウォーターロウ、クライヴ・ベル、ヴァネッサ等々です」と記し、また、差出人として、自分の名前に続けて「クラブ」の秘書兼雑用係と記している。このオープニング・セレモニーには各自が回想録を持ち寄り、その後ちょっとした話合いを持つ予定であるとも記されていて、これが開会を祝う会であると同時に出席者全員でクラブの在り方を探る会でもあったと考えられる。

結局、クラブの不文律によると、毎回メンバーが回想録（一つの会合で3編、後には2編）を読み上げ、その後討議が続くが、回想録については書き手が忌憚なくものが言えるように、会の外では言及しないこと、個人的な回想であること、調査を要するようなトピックであってはならないということになった。その当然の結果として、会合は非常に陽気で歓声の渦に包まれた。皆で回想録を聞いたあとはディスカッションとなるが、たいていの場合、その文学的価値についてはその内容についてであって、それがいつしか共通の思い出話（リトンが世を去ってからは特にケンブリッジ時代の思い出話）へと移っていき、最後は打ち明け話でお開きとなった。残念ながら、大半のメンバーが原稿を持ち帰ることを望んだので、今日、記録文書は全く存在せず、従って、どのようなトピックであったのかさえ知る由もないが、幸い、大半の者が後年その内容を活字にしている。ただし、「メモワー・クラブ」以前の会合の場合と同じく、残念ながらそこにかれらの口調、しぐさ、その場の雰囲気までも求めることはできない。

「メモワー・クラブ」の第1回会合が1920年3月20日に開催され、この会は1938年ないしはクウェティンによれば、1939年末のかれの妹アンジェリカ・ベルの誕生日をもって終焉することになる。しかし、真相はどうやら、第二次世界大戦を挟んでその後もまた新世代のメンバーを加えながら続いていったらしい。その根拠としてはふたつ——ひとつは、このクラブの規則に従って当初モリィが買って出た「秘書兼雑用係」が1946年以降、ヴァネッサ、クウェンティン、そして最後にフランシス・パートリッジに引き継がれていったという記述、もうひとつは、1945年以降のちょっとした出来事についての記述である。その出来事とはこうである——その年までに既にメンバーとなっていたダーモッド・マッカーシィが、年功序列というクラブのルールに従ってEMフォスターの後で自分の父親についての回想録を披露した。しかし、これは少々フォスターの不興を買うこととなった。なぜなら、若輩であるダーモントの方がより大きな笑いを取ったからである。会場に作家のモリィ、文芸評論家のデズモンド両名の姿があったからフォスターとしてはなおさらよいところを見せたかったでもあろう。有名な作家にまつわる興味深い逸話ではある。(Boyd 111)

では、クラブの会合は具体的にはどんな風だったのであろうか。1937年4月29日付の日記の中でヴァージニアがある日の会の様子をこう伝えている――

さまざまな出来事があった……とりわけ楽しかったのは、実際、とても幸福感を覚えたのは、「メモワール・クラブ」だった。私たちはエトワール（レストランの名――筆者注）の裏手にある居間といった風情の場所で食事をした――そして、雨の夜だったのにまもなくわくわくしてきた。ダンカン（風邪をひいており、パニィ（デイヴィッド・ガーネットの愛称――筆者注）の方は百日咳を引いていた……でも、デズモンドはナイチンゲールのようにべらべら喋っていた。かれが今年みたいに上機嫌だったことはない。まるで、ひたすら喜びを発散するのを楽しんでいるみたいだった。そして、私の虚栄心の小さな指抜きはたちまちいっぱい満たされた。なぜなら、メイナードが私の「ギボン」は誰のものよりも20倍も優れている、それに、『歳月』も――よい本だ――と褒めてくれた。D（デズモンドのこと――筆者注）も、私についての長いエッセイを書こうと言ってくれた（でも、書かないと思う）。それから、モリィと私はキスをした。そして、メイナードがデズモンドはケンブリッジのレズリー・スティーヴン・レクチャー（LSはヴァージニアの父――筆者注）を引き受け、かれについて話すべきだと示唆した。私たちは風味のある肉料理を食べた。その後、アトリエに向かった。ダンカンがフィレンツェでの冒険、すなわちメイナードについての偽りの情報を伝えたときの冒険を見事なペーパーにして読みあげた。次いで、親愛なるデズモンドが、「周囲に促されて話すはめになり」、かれは短い覚書を手にすると、座り心地の良い椅子に腰を下ろし、落ち着きはらって全く淀みなくウィルフレッド・ブランドのひととなりについて語った……ああ、実に見事だった、そして、私たちがもっと続けてくれてもちっとも退屈しないだろうに思っているまさにそのとき、かれは話を終えた。それから、モーガン（フォースター――筆者注）が、かれが引き受けてくれと頼まれている『TE ロレンス書簡集』の紹介文を読み上げた。でも、これは今ではパニーが執筆することになっている。それから、私たちは雨の中を外に出て行った。デズモンドが、我々は一日たりとも歳をとらなかった、我々の会は以前と同じように楽しいと言った。するとモーガンが、皆が大好きだと感じてあやうく泣き出すところだったと言った――実際、かれはそう言ったと思う。とにかく大成功だった。（Ed. Rosenbaum, *The Bloomsbury Group* 61-2）

まとめ

「はじめに」でも記したように、本稿では筆者は拙論「Bloomsburyの知的貴族たち」とは極力重複しないようなアプローチを試みたつもりである。

そこで、「まとめ」では、先の論文ではほとんど取りあげなかったメンバー、E M フォースターに登場して貰おうと思う。これまで、「ブルームズベリー」を語るときに研究者たちがかれに注目することはほとんどなかったが、しかし、これには納得がいく。レギュラーメンバーと呼べるのかさえおぼつかないからである。「ブルームズベリー」の中核的メンバー、ヴァネッサも、「……もう一人のとらえどころのない訪問者はE M フォースターです。私たちと一緒にいるときは完璧に寛いでいるのですが、同じ位完璧に自分自身の世界へと姿を消してしまうのです」(Ed. Rosenbaum, *The Bloomsbury Group* 107) と記しているほどなのだから。

そんなフォースターをあえて持ち出す理由はふたつある。ひとつは、「ブルームズベリー」のメンバーを結びつけていたレイモンドの言うところの「ブルームズベリー・スピリット」をフォースターが見事に代弁しているからである。もうひとつは、本研究の最終テーマがヴァージニア・ウルフとその叔母J M キャメロンについてであることを考えれば、「ブルームズベリー」の中でも友人仲間としてのみならず作家としてもウルフと少なからぬ関心を寄せあった人物にとりわけ着目したいからである。(両者の影響関係については拙論「Only Connect: Virginia Woolf と E M Forster」を参照いただきたい)

以下、フォースターの言うところにしばらく耳を傾けながら、「ブルームズベリー」的精神をたずねたい。まず、かれの「寛容の精神」と題するエッセイの一節から――

愛というのは、自分の家庭や友人のいないところでポテトを買う行列に他人といっしょに並んだとたん、たいていは挫折してしまうものです。行列には、寛容の精神が必要です。これがないと「なぜ、みんなぐずぐずしているんだ？」と考えてしまう。これは地下鉄の中でもおなじで、こんどは「どうして、みんなこうでぶなんだ？」となり、電話では「なぜ、こう耳が遠いんだ」となるか、逆に「なぜ、もっとはっきり喋らないんだ」ということになります。寛容の精神は、街頭でも会社でも工場でも必要ですし、階級間、人種間、国家間ではとくに必要です。さえない美德ではあります。しかし、これには想像力がぜったい必要なのです。たえず、他人の立場に立ってみなければならぬのですから。それは精神にとって好ましい訓練になります。……まだ二つ、申しあげておきたいことがあります。第一は、他人の狂信的な精神を指摘するのは容易でも、自分のそれを見抜くのは難しいということです。……もう一つ、あらかじめ批判を封じるために言っておきたいことがあります。寛容は虚弱とはちがう、ということです。人にたいしてがまんするというのは、屈服することではありません。そこが複雑なのです。しかし、文明の再建は複雑な問題にならざるをえないのです。(『老年について』72-4)

つぎに、「私の信条」と題する評論からの一節――

私のもっとも尊敬する人びとは、自分は死にはしないし、社会も永遠であるかのような生き方をしている。どちらの仮設も嘘だが、食べたり働いたり愛したりし続けていくためには、そして人間の精神にいくつか風穴をあけておくためには、どちらの仮設も真実としなければならないのだ。至福の千年が人類に訪れることはあるまい。現在のもの以上にすぐれた国際連盟ができることもないだろう。いかなる種類のキリスト教あるいはそれに代わるものも、世界に平和をもたらし、完璧な個人を生み出すとは考えられない。「改心」など起こるはずもないのだ。それでも、絶望する必要はない。というより、できないのだ。歴史を見れば、人間が剣の下でもつねに創造的活動をつづけてきたことが分かる。芸術的、科学的、あるいは家庭的な仕事を、ただそのためだけにつづけてきたことが分かって、いま空襲（第二次世界大戦のこと――筆者注）の脅威にさらされているわれわれも、それを見習えばいいことが分かる。……人間の美点つまり世界の美点は、つねに創造活動をやめず、友情と誠実それ自体を信じていることにあるのだ。そして、たとえ「暴力」が居すわるどころか、将来もこの紛糾している大会社の大株主にとどまるとしても、想像力もとどまってゆずらず、暴力が眠ったときにはかならず支配権を握ると私は信じているのである。（『老年について』16-7）

上記評論の終わりで、フォースターは「以上は、個人主義者にして自由主義者の感想である。」と記している。これをそのままメンバー全員のものを受けとめるのは無理に違いないとしても、少なくともレイモンドの言う「ブルームズベリー・スピリット」の最大公約数的なところとは言えるだろう。とくに、相対的なもの見かた、そこから生まれる寛容の精神、それを礎にした寛大で率直な人間関係、そして、国家の制度や英雄的行為よりも知的で上質な人間関係と人びとの創造的営みをこそ世界の救世主とするあたりにそれがよく出ている。「個人主義にして自由人」であるのはフォースターに特有ではなくメンバー全員について言えるだろう。仮にも「ブルームズベリー」になにか統一的な思想があったとするならば、各メンバーがそれぞれ異なる分野でそのような独創的な業績を達成することは不可能であったろうからである。ヴァージニア・ウルフも「あるソサイエティ」と題した短編で個人主義、自由主義を奨励している。以下の引用はストーリーの最終場面からで、折しも第一次大戦下、「あるソサイエティ」の女性会員が話し合っている――

「それであなたは私に知性を信じなさいっておっしゃるのね。」

私たちが話している間、外の通りでは男たちがしわがれた疲れ切った声で叫んでいた。耳をすませると、講和条約の調印がなされたばかりだということが分かった。声は次第に消えていった。雨が降っていたが、花火が打ち上げ中止にならないことは間違いなかった。

「うちの料理人がイヴニング・スタンダード紙を持ってくる頃だわ、」とカスティリアが言った、「そうしたら、アンがお茶を飲みながら、それを一字一字辿りながら読むことでしょう。もうおいとましなければ。」

「それは絶対だめよ——絶対に、」と私は言った。「あなたのお嬢さんが本を読めるようになった時、彼女に教えられることはたったひとつしかないのよ——それは自分自身を信じるということだわ。」

「そうね、それが変革をもたらすことでしょうね。」(Woolf, *Selected Short Stories* 20)

おわりに——共生・共存の時代へ：「ブルームズベリー」からのメッセージ

世界には人間があふれています。怖いほどの混雑ぶりです。まさに歴史上はじめての混雑ぶり、たがいにぶつかりあっています。その相手は大部分が知らない人間で、なかには嫌いな相手もいます。たとえば皮膚の色が気に入らないとか、鼻の形が、涙をかむのが、逆にかまないのが、あるいは話し方が、体臭が、衣装が、ジャズ好きが、といろいろなことが気にいらないというわけですが、では、どうすればいいか？(E M フォースター「寛容の精神」)

先述したように、「ブルームズベリー」の築いたいわば拡大家族ともいうべきものは、血縁外の人びとで構成されていた。また、その構成員には少なからぬ同性愛者が含まれていたばかりか、仲間うちの恋愛が三角関係、四角関係の様相を呈することも珍しくなかった。しかし、かれらはそうした複雑微妙な展開に身をおきながらもなお最終的には当事者自身がそれをよしとし、その友情が壊れることはなかった。たとえば、ヴァネッサとクライヴの場合であるが、夫妻の間にはふたりの幼い息子がいたが、ヴァネッサとロジャー・フライの間に愛が芽生えた。クライヴはその愛がヴァネッサをより幸せにするものであることを認めた。そして夫妻はその後生涯に亘って親友であり息子たちの父母でありつづけた。一方、クライヴはその後、別の女性との恋愛を享受した。ところが、ヴァネッサの愛が再びロジャーからダンカンへと移るという事態が起きた。しかし、ダンカンは基本的に同性愛者であったので、ふたりの間に娘が生まれた後は生涯を親友兼敬愛する同業者として共に絵を描きながら暮らした。ヴァネッサに恋人として見捨てられた気の毒なロジャーは1926年8月15日付の書簡にこう記している——

裏切られた夫クライヴと見捨てられた恋人である私をその仲間を含みながら、不貞と相互の寛容によって成りたつ理想に近い家族。じつにそれは因習に対する合理的精神の勝利です。

また、メイナード(・ケインズ)の愛が自分からダンカンに移ったという事実直面したとき、

リットンは当然のことながら懊悩したが、かれ曰く、「メイナードとはあまりにも長い間友人だったので、いまさらそれをやめるのは無理というものであった」。このように、血縁によらぬあるひとつの理想的な家族の形をいち早く示したのはかれらであった。

また、同性愛者に市民権を与えたのもかれらであった。国同士の紛争には国を越えた国際的な政府が必要だと考えたのもかれらであり、人びとが子どもの絵位にしか思わなかったピカソやゴッホやセザンヌなどの後期印象派の絵画の真価をいち早く認めたのもかれらであった。また、フェミニズムの先鞭をつけたのもかれらであった。

今日、「ブルームズベリー」関連の出版物が増え続けているのは、地球規模で共生・共存の方途を見出さずにはわれわれ人類の存続が危うくなっているという今日の状況と関わっているからであろう。かつてアウトサイダーとして、あるいは非国民として揶揄され、非難され、憎悪されたかれらが後年、とくに戦後に再評価され、その後半生に社会的認知を得ている。例えば、メイナード・ケインズは男爵に、レナード・ウルフは *The New Statesman* 誌の理事になり勲章を得たし、E M フォスターはケンブリッジ大学の名誉特別教授に、また、デズモンド・マッカーシイはナイト爵を授けられた。そして、ウルフの場合はどうか。世俗の権威に与するのをよしとせず、いずれの勲章も断った。いかにも彼女らしい。

また、一般的などころでは、今日、フォスターやヴァージニア・ウルフの作品、あるいはリットン・ストレイチィとかれのパートナー、キャリントンの生涯が映画化されていることもまた、かれらが社会的認知を得ているもうひとつの証と言えるだろう。*

「ブルームズベリー」の人びとは「理性の眠りは暴力という怪物を生み出す」との信念を貫いて、戦時下にあってはひたすら自己防衛路線をとり、ペンや絵筆によって密かに人間の愚かさや戦っていたが、そうしたかれらの作品や意見は、終戦とともに、苦い幻滅感にさいなまれていた人びとの注意を改めてひくところとなり、かれらは一躍有名になった。

いわば革命的目的を平和的手段によって成し遂げたかれらに今日われわれが学ぶことは少なくないであろう。そして、幸いにも、かれらの大半がそれぞれ作品（小説、評論、伝記、回想録、書簡など）を残しており、我々はそれらを読むことによってわれわれの、ひいては、世界のありように、揺さぶりをかけることができるのではないだろうか。

* 映画の邦題は、「インドへの道」、「ハワーズ・エンド」、「眺めのよい部屋」、「モーリス」（以上はフォスター関連）、「キャリントン」（以上はリットン&キャリントン関連）、「オーランドー」、「アワーズ」（以上はウルフ関連）

引証・参考文献 *は引証文献

- Asbee, Sue. *Virginia Woolf*. East Sussex: Wayland Ltd, 1989.
- Atkin, Jonathan. *A War of Individuals: Bloomsbury attitudes to the Great War*. Manchester: Manchester UP, 2002.
- * Bell, Clive. *Old Friends*. London: Cassel Publishers, 1956.
- * Bell, Quentin. *Bloomsbury*. New edition. London: Weidenfeld & Nicolson Ltd, 1986.
- * ——. *Bloomsbury Recalled*. NY: Columbia UP, 1995.
- * ——. *Elders and Betters*. London: Pimlico, 1997.
- Boyd, Elizabeth F. *Bloomsbury Heritage: Their Mothers and their Aunts*. N.Y.: Taplinger Publishing Company, 1976.
- Caws, Mary Ann. *Virginia Woolf*. London: Penguin Books Ltd, 2001.
- . *Women of Bloomsbury: Virginia, Vanessa and Carrington*. N.Y. & London: Routledge, 1990.
- Chadwick, Whitney & Courtivron, Isabelle de, eds. *Significant Others: Creativity & Intimate Partnership*. London: Thames and Hudson Ltd, 1993.
- Dunn, Jane. *Virginia Woolf and Vanessa Bell: A Very Close Conspiracy*. London: Virago Press, 2000.
- * Edel, Leon. *Bloomsbury: a house of Lions*. London: Book Club Associates, 1979.
- * Fry, Roger. *Letters of Roger Fry Volume Two*. Ed, with an Intr., Sutton, Denys. London: Chatto and Windus Ltd, 1972.
- * Gadd, David. *The Loving Friends: A Portrait of Bloomsbury*. N.Y. & London: Harcourt Brace Jovanovich, 1974.
- * Gardner, Diana. *Rodmell Papers: Reminiscences of Virginia and Leonard Woolf by a Sussex Neighbour*. The Bloomsbury Heritage series. London: Cecil Woolf Publishers, 2008.
- Garnett, Angelica. *The Eternal Moment: essays and a short story*. Orono, Maine: Puckerbrush Press, 1998.
- Lee, Huger, ed. *A Cézanne in the Hedge and other memories of Charleston and Bloomsbury*. Chicago: The University of Chicago Press, 1993.
- Marcus, Jane, ed. *Virginia Woolf and Bloomsbury: A Centenary Celebration*. London: Macmillan Press Ltd, 1987.
- Markert, Laurence W. *The Bloomsbury Group: a reference guide*. Boston, Mass: G. K. Hall & Co., 1990.
- Marsh, Jan. *Bloomsbury Women: distinct figures in life and art*. Foreword by Frances Partridge. London: Pavilion Books Ltd, 1995.
- Naylor, Gillian, ed. *Bloomsbury: the artists, authors and designers by themselves*. London: Pyramid Books, An Imprint of the Octopus Group Ltd/Amazon Publishing Ltd, 1990.
- Nicolson, Harold. *The Development of English Biography*. Hogarth Lectures on Literature Series. N.Y.: Harcourt, Brace and Company, 1928.
- Palmer, Alan and Veronica. *Who's Who in Bloomsbury*. NY: St. Martin Press, 1987.
- Partridge, Frances. *Love in Bloomsbury: memories*. Boston: Little Brown, 1981.
- . *Memories*. London: Robin Clark Ltd, 1982.
- Richardson, Elizabeth P. *A Bloomsbury Iconography*. Winchester: St Paul's Bibliographies, 1989.
- * Rosenbaum, S. P. *Aspects of Bloomsbury: Studies in Modern English Literary and Intellectual History*. London: Macmillan Press Ltd, 1998.
- * ———. *The Bloomsbury Group: A Collection of Memoirs and Commentary*. Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press, 1995.
- . *Edwardian Bloomsbury: the Early Literary History of the Bloomsbury Group; Volume Two*. N.Y.: St Martin's Press, 1994.
- . *Georgian Bloomsbury: the Early Literary History of the Bloomsbury Group; Volume Three*. N.Y.:

- Palgrave Macmillan, 2003.
- . *Victorian Bloomsbury: the Early Literary History of the Bloomsbury Group; Volume One*. London: Macmillan Press Ltd, 1987.
- * Rosenblatt, Aaron. *Woolf for Beginners*. N.Y.: writers and Readers Publishing, 1987.
- Seller, Susan. *Vanessa and Virginia*. Ullapool: Two Ravens Press Ltd, 2008.
- * Shone, Richard. *Bloomsbury Portraits: Vanessa Bell, Duncan Grant and their circle*. London: Phaidon Press Ltd., 1996.
- Spalding, Frances. *National Portraits Insights: The Bloomsbury Group*. London: National Portrait Publications, 2005.
- * Stansky, Peter. *On and about December 1910: early Bloomsbury and its intimate world*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard UP, 1996.
- Tranter, Rachel. *Vanessa Bell: A Life of Painting*. The Bloomsbury Heritage series. London: Cecil Woolf Publishers, 1998.
- Webb, Ruth. *Virginia Woolf*. The British Library Writers' Lives series. London: The British Library, 2000.
- Woolf, Leonard. *Hunting the Highbrow*. Hogarth Essays Second series. London: Leonard & Virginia Woolf at The Hogarth Press, 1927.
- * Woolf, Virginia. *Moments of Being: Autobiographical Writings*. London: Pimlico, 2002.
- * Woolf, Virginia. *Selected Short Stories*. Ed.with Intro. & notes, Sandra Kemp, London: The Penguin Books Ltd., 1993.
- * Yoss, Michael. *Raymond Mortimer: a Bloomsbury voice*. Bloomsbury Heritage series; 20. London: Cecil Woolf Publishers, 1998.
- * フォスター、E. M.『老年について』小野寺健編。東京：みすず書房、2002年。
- 坂本公延『ブルームズベリーの群像——創造と愛の日々』東京：研究社、1995。
- * フォスター、E.M.『民主主義に万歳二唱 I』E.M.フォスター著作集 11。小野寺健ほか訳。東京：みすず書房、1994年。
- ベル、クウェンティン『回想のブルームズベリー——優れた先輩たちの肖像』北條文緒訳 東京：みすず書房、1997年。
- * 村松加代子「ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・キャメロンについての考察—ふたつのアーティスト・コロニーを中心として—」『跡見学園女子大学文学部紀要 第42号(2)』跡見学園女子大学、2009年。37-49。
- 。「英国伝記文学の歴史と特質」『跡見英文学 第12号』跡見学園女子大学、1999年。37-49頁。
- * ——。「Only Connect : Virginia Woolf と E.M. Forster」『跡見英文学 第15号』跡見学園女子大学、2002年。19-30頁。
- 。「伝記文学と英国人」『跡見英文学 第11号』跡見学園女子大学、1998年。37-53頁。
- * ——。「Bloomsburyの知的貴族たち」『跡見英文学 第4号』跡見学園女子大学英文学会、1991年。1-42頁。
- 。「私ひとりの部屋—女性と小説—」京都：松香堂書店、1984年。

[なお、本文中、英文文献からの引用については、すべて筆者の日本語訳で統一しました。]